

葛島村戸長	明治一四・一二	明治一六・二	北島 翁輔	明治三二・五	明治三三・六	明治三三・六	細川 周太
四徳村戸長	明治一四・一二	明治一七・六	小松 治郎吉	三三・八	三三・六	三三・六	桑原 保松
大草村戸長	明治一五・五	明治一八・三	佐々木 宗一	三三・九	三三・七	三三・七	塩沢 伊八郎
葛島村戸長	明治一六・三	明治一八・三	片桐 市治郎	三三・一〇	三三・九	三三・九	下平 雅夫
四徳村戸長	明治一七・六	明治一八・三	小松 大八	三四・五	三四・四	三四・四	諏訪 俊
大草村外二ヶ村戸長(連合)	明治一八・三	明治一九・五	小林 伴七郎	三五・一	三五・一	三五・一	福沢 義太郎
明治一八・三	明治一九・五	佐々木 宗一	四〇・六	四〇・六	四〇・六	四〇・六	塩沢 伊八郎
明治一九・五	明治二〇・二	佐々木 宗一	四一・三	四一・三	四一・三	四一・三	塩沢 伊八郎
明治二〇・二	明治二一・三	桑原 保松	四二・一	四二・一	四二・一	四二・一	片桐 政弥
明治二一・三	明治二二・九	諏訪 俊	四三・三	四三・三	四三・三	四三・三	井上 成乗
明治二二・九	明治二三・五	米山 真一郎	四四・五	四四・五	四四・五	四四・五	原田 増次郎
明治二三・五	明治二四・五	佐々木 治一	四五・三	四五・三	四五・三	四五・三	佐々木 治一

大正 五

大正七・一一

遠藤 肇

明治三三・三

明治三四・五

塩沢 伊八郎

五・一二

大正七・一一

古畑 久太郎

一四・六

二八・六

仁科 九八郎

七

九・三

高坂 徳風

一八・七

二九・一〇

米山 真一郎

九・七

昭和二・一

塩沢 貞雄

二九・一一

三一・三

米沢 八十太郎

昭和二・二

六・八

寺平 幾次郎

三一・四

三二・四

下平 雅夫

六・八

七・一

宮沢 願美

三二・六

三二・八

小林 寧夫

七・一

一五・一

仁科 一郎

三二・九

三三・一〇

片桐 政弥

一五・一

一五・九

下平 勇

三四・二

三四・五

桑原 保松

一五・九

二一・五

米山 盈

三四・六

三四・二

高坂 徳風

一一・五

一一・四

小林 信人

三五・一

三六・四

米山 清之丞

一一・四

一一・三

宮下 直雄

三六・四

三六・二

片桐 治佑

一一・三

一一・三

仁科 定吉

三六・五

四〇・五

佐々木 浩一

一一・三

一一・七

米山 盈

三六・五

三七・二

小池 稲吉

一一・三

一一・三

下平 雅夫

三八・六

四〇・四

宮沢 平八郎

一一・三

一一・二

仁科 九八郎

四〇・七

四一・三

桃沢 恒次郎

明治二二・五

明治二三・二

仁科 九八郎

四〇・七

四一・三

桃沢 恒次郎

第二章 村政一般

期は六カ年であつたが、大正二年から総選挙により單記法を用い、その任期は四カ年となつた。大正十四年から一・二級の階級制を撤廃した。

。明治十九年四月二十九日選挙

一級 高坂源太郎 小松万次郎 横前伴造 下平鷹太郎

香坂彰衛 宮沢平八郎

一級 仁科九八郎 桑原保松 塩沢伊八郎 片桐市治郎

諏訪 俊 北島翁輔

。明治二十五年半数改選

一級 香坂豊次郎 片桐市治郎 塩沢隆七

一級 宮沢平八郎 北島翁輔 横前栄三郎

。明治二十八年半数改選

一級 高坂徳風 塩沢伊八郎 下平市重郎

一級 戸枝香苗 仁科九八郎 下平雅夫

。明治三十一年選挙

一級 佐々木宗一 鈴木文太郎 諏訪 俊 松村三代吉

矢沢円次郎

二級 小松芳次郎 米山長吉 片桐政弥 米山末吉
大沢岩太郎

。明治三十四年半数改選

一級 宮沢平八郎 仁科九八郎 高坂徳風 片桐和志蔵

二級 宮崎詠治 若山亦平 山岸熊太郎 戸枝香苗

。明治三十七年半数改選

一級 諏訪 俊 片桐政弥 塩沢良一郎 原比佐次郎

宮沢喜平治

一級 宮崎民次 福井新次郎 桃沢恒次郎 香坂六郎

小松市十

。明治四十三年

一級 宮沢平八郎 米山清之丞 仁科九八郎 北島良弼

米沢佐平治 萩原八九郎

二級 宮沢喜平治 小松大八 佐々木浩一 横前俊逸

大林元吉 片桐健造 富永権之助

。大正二年

一級 米山真一郎 萩原八九郎 片桐治佑 松村松次郎

米沢久三郎 佐々木浩一 横前俊逸 米山清之丞

桃沢智広

一級 富永権之助 米沢佐平治 小池 清 洪坂金五郎

宮下庄吉 宮崎民治 香坂六郎 倉沢年雄

戸枝香苗

。大正六年

一級 鈴木静雄 片桐市郎 片桐和志蔵 森本竹太郎

倉沢年雄 宮沢喜平治 小松孫重 香坂与次郎

松村松次郎

一級 永原壯太郎 洪坂金五郎 横前俊逸 横沢民作

小松芳次郎 古川伝弥 吉沢千賀太郎 米沢佐平治

福島政太郎

。大正十年

一級 佐々木浩一 小松新次郎 香坂与次郎 米山真一郎

米山造次 片桐政弥 北沢宗太郎 宮崎音四郎

塩沢貞雄

一級 仁科一郎 小松鷹十郎 久保田喜代作 原信三

第二章 村政 一般

小池保信 寺平幾次郎 富永兼蔵 小松友作
北沢虎佑

。大正十四年(階級撤廃)

吉川四郎 小松崎次郎 米沢佐平治 富永兼蔵

石原与一郎 片桐茂一 宮沢喜平治 荒井文一郎

柄山一雄 米山清之丞 宮沢愿美 仁科一郎

佐々木浩一 鹿養銀次郎 福島政太郎 藤川万吉

米山真一郎

。昭和四年

湯沢幸太郎 石原与一郎 小松実男 片桐富三

湯沢又次郎 小松新次郎 仁科一郎 宮上作十郎

小林信人 松沢孫人 高坂応平 下平 勇

宮沢愿美 片桐一美 米山 盈 半崎馬平

米沢佐平治 金子伊惣次

。昭和八年

小林信人 米沢佐平治 米山 盈 小木曾俊

高坂応平 原 栄一 真島勝蔵 湯沢又次郎

宮沢恩美 松沢金重 諏訪要一 平沢喜三次 米山 盈 有賀俊一 遠山逸恵 諏訪要一
片桐茂一 片桐富三 小松実男 小松喜三次 佐々木信 岩本市夫 大久保和一 湯沢清八
桑原鉄象 柴田秋太郎 小松安義 高坂応平 福井勝一 小松慶夫

。昭和十二年

小林信人 米沢佐平治 米山 盈 小木曾俊

。昭和二十二年四月

久保正成 高坂応平 片桐茂一 小松兼夫

小松 薫 坂井正雄

湯沢又次郎 平沢喜三次 鹿養八藏 松沢金重

小松慶夫 宮崎計治 小松 薫 坂井正雄

石原与一郎 荒井文一郎 原 三七 小松実男

湯沢清八 永原泰造 大林基雄 遠山逸恵

萩原与雄 桃沢智広

戸枝益巳 秋城大吉 南沢久夫 岩本市夫

。昭和十七年五月

宮下清志 下沢忠雄

小松磯男 宮崎秋男

湯沢幸次郎 萩原与雄 松村英一 米沢義央

富永茂夫 有賀俊一 真島信夫 片桐資朗

小池賢一 宮崎春夫 宮下重雄 下平 勇

。昭和二十六年四月

片桐安夫 高坂応平 久保正茂 宮崎市太郎

秋城大吉 白沢清司 寺平勇一 下沢忠雄

原 栄一 富永国三 小林信人 米沢末三

宮崎輝馬 南沢保美 小松慶夫 森本勲夫

富永増雄 仁科定吉

富永新衛 真島信夫 米山政弘 小松 薫

。昭和二十一年四月

宮崎秋男 片桐準一 宮下直雄 吉沢 勇

小松安男 半崎武雄 宮下清志 吉沢清男

塩沢 総 杉沢準一郎 片桐安夫 北原国雄

片桐栄一 千村武徳

。昭和三十年四月(再出)

米山伊千夫 米山政弘 下沢忠雄 下平晴実

明治三十一年 片桐市治郎 宮崎民次 羽柴重次郎 原比佐次郎

片桐準一 石原 与 有賀重助 前原幸一

三二年 小林寧夫 塩沢伊八郎 塩沢良一郎 小池福吉

千村武徳 湯沢銀太郎 竹沢一二 有賀正三

三三年 柄山辰太郎 桃沢恒次郎 片桐治佑

平沢一夫 米沢末三 富永新衛 井沢賢一郎

三四年 米沢八十太郎 宮下庄吉 細田政太郎

小松久一 小池 正 熊谷義章 三沢猶作

三五年 下平雅夫 小林寧夫 横前栄三郎 大林元吉

浜崎英美 小松 薫

細田周吉

(註 合併時まで)

補欠の分

明治三二年 石原与三吉 小松治郎吉

三七年 小松三代吉

一三三年 羽柴重次郎 塩沢隆七

三八年 米沢八十太郎 鹿養善五郎 矢沢門次郎

一七七年 高坂源太郎 佐々木宗一

四三年 小松市十 香坂六郎 小松菊太郎

二八年 諏訪 俊 松村三代吉 小松次郎吉

戸枝香苗 片桐治佑 有賀長吉 塩沢元十郎

石原与三吉

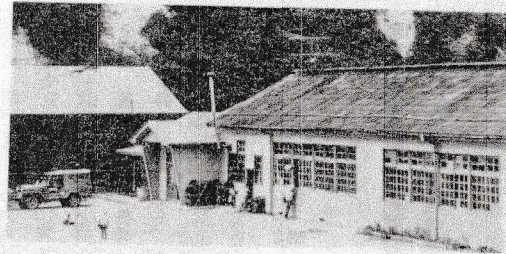
倉沢年雄 松村松次郎 小林庄吉 片桐治佑

三〇年 横前伴造 若山亦平 米山真一郎 大正 六年

仁科兼弥 小林庄吉 片桐治佑

矢沢門次郎 下平長次郎

富永三九郎 石原与一郎 遠山幸太郎



四 德 学 校

明治四十一年

泉訥庵明治十三年まで教員をつとめ翌十四年から小松大八教員となる。明治十九年から「南向小学校」に記したように校名幾変せんしたが、この年分教場となつて昭和三十三年中川村となるまで続いた。

付記

昭和三十三年八月一日中川村となつたとき、中川東小学校四徳分校と校名を改めたが、昭和三十六年六月の梅雨前線集中豪雨にあい大被害を蒙り、住民の全部がこの地に生活することの不可能なため移住してしまつたので、昭和三十八年七月三十一日、最後まで残つた一人の児童の転出によつて廃校となつた。

八、桑原学校

明治七年八月、太草報国学校から分離してその支校を設立する。

校名 桑原支校 教員塩沢島吉 生徒在籍六〇名

明治十一年 教員、小松大八

明治十二年 教員、小松大八（年三六円）太田浅太郎（年一八円）有賀徳太郎（年一八円）この年地球儀一個を備える、価格金二円九八銭八厘。

明治十四年 教員、近江沢浅太郎

有賀徳太郎 萩原八九郎 生徒六三人 傘二七本及び校印を備える。この代金

四円四〇銭三厘

その後、いく度か校名が変つたが、これは「南向小学校」の章に記す。

付記

昭和三十三年八月、片桐村と合併して中川村になると同時に中川東小学校桑原分校となつたが、それから三年後大災害にあい、また、小浜ダム建設に伴つて離村者も多数あつて児童が減少したため、昭和三十九年三月三十一日遂に廃校となつた。明治七年開校以来九十年の歴史を閉じたのであるが、この間地域住民の文化の中心であり学童教育の場としてその使命を果たしてきたのであつた。

九、日曾利学校

明治七年 太草報国学校から分離し中沢村吉瀬耕地と合して一校を設立する

日曾利耕地 四七戸 二九二人 吉瀬耕地 四四戸 三〇三人

校名 日曾利学校 教員 宮沢普山

生徒 男五四人 女一六人 世話役 香坂彪衛 宮下良五郎

明治十二年

教員 九月宮沢普山退任 鳥山啓就任

明治十三年

第三編 現 代

教員 久我祖宗 生徒 五三人

明治十六年

委員、北沢伸衛 小林伴七郎 坂井吉平 戸長、佐々木宗一 木下実太郎 以上連署で上申し吉瀬を分離した。

明治十七年

本年始めて大草校の付属となる。

教員 久我祖宗に代つて十一月から豊島智成 香坂五郎 大林元吉 古川久太郎
委員 吉川新九郎 生徒四人 男四三、女五
寄付 香坂彪衛外六人から三九円の寄付があつた

十、北山方学校

明治十九年、北山方谷田に、大草学校北山方派出所が設けられて、尋常二年までの教育をこころした。

教員 諏訪三四郎 大林之吉

明治二十二年、大草学校が、南向尋常小学校になって、この学校も、北山方分校と、名まえがかわり、昭和六年まで続いた。

十一、戦時学校疎開

受入場所 常泉寺

受入期日 昭和二十年四月十三日

受入人員 第一回 十三日 七五人

第二回 二十日 三六人

学校名 東京都世田ヶ谷区下馬町一ノ二三一 駒籠国民学校 校長 杉浦守正
人 員

職員	男	女	計	児童	男	女	計
教員	一	三	四	一年	一	三	四
寮母	五	五		二年	五	二	七
作業員	四	四		三年	七	八	一五
				四年	一一	一一	二二
				五年	一五	六	二一
				六年	一四	一一	二六
				計	五三	四二	九五

教員氏名

寮長 中山邦俊 三二歳
教員 胡桃沢智恵 二三歳
第五章 教 育

小出良作 (一八六一—一九四〇) こうい

幕末の孝子、学者。文久元年十一月赤須村(現駒ヶ根市)下平に彦重郎の子として生れた。幼名三郎を後に彦三郎と改め、通称義貴又は務貴と称した。六歳の時痘症を患って明を失ったが父は厚紙を切り字形を造って教えた。長じて近隣の医師某に就いて学び、また遊歴して来た儒者を招いて教えを受けて学業大いに進み、京に出て三ヶ年修学して帰郷した。性穎悟寡言で強記、京都で城谷中書・貫石海屋に師事し、名古屋藩儒学塚田多門に就いて修学した。極めて強記で仁義の学に通じ、算数に通じて、官の諮問に応じ直ちに之を解明した。痘患の時彼の親が神に祈ったので命を得たと聞いて、自ら伊勢大廟に詣ずること三十三回に及んだ。父の歿するや廬を墓側に結び、三年の喪に服しようとしたが、母が彼の健康を害うことを憂い、早く家に帰るようにと諫めたので五十余日で家に帰った。爾来日毎三回神を着けて墓参を三ヶ年続け風雨の日も止めなかったという。その孝行を極めたことは城谷中書の弔辞にも明かである。幕府はこれを賞して御紋付袴一領を

下賜した。明治十七年八月八十二歳で歿した。

弘 阿 (一七五二—一八七〇) こうあ

江戸時代の僧侶、歌人。寛政四年下殿島村(現伊那市)に小等原作蔵の長子として生れた。文化五年八月東都檀林靈巖寺に修業し、業成つて、文政四年安樂寺第十六世を継いだ。文化六年三月赤須・上穂両町(現駒ヶ根市)が全焼した時安樂寺も焼失し、文化八年本堂の再建に取りかかった。弘阿は鋭意檀信徒を勧化し、伽藍の再建に尽瘁し旧に倍する中興の偉業を成した。文政五年(一八三三)増上寺大僧正の副翰を得て参内して、仁孝天皇の天顔を拝し、法橋上人に任ぜられたがその論旨と奉書は現在寺に保存されている。弘化三年(一八四〇)には孝明天皇にも拝謁を賜った。文久三年職を退き別房に入ったが、慶応元年当寺十七世法順が病にかかったため再び職に復した。明治二年老衰のため辞職したが法弟子二十余人に及んだ。歌を好み、加茂季鷹の門に入り、小町谷吉憲(別項)、福沢憲治(別項)等と交わった。明治五年八月八十一歳で永眠した。

。集めても見ろべきものをおこたりのまどに夜な夜なとぶ螢かな

庭花

。このころは松の梢もうづもれて花よりしらむ軒のあけぼの

(霞水翁春山上人五十年御遠忌追悼五十首組和歌)

光 岸 (一六六二—一七三三) こうがん

江戸時代の僧侶。基蓮社到誓光岸比丘といひ、上片桐の浄土宗清泰寺中興の祖であり念仏開山上人と讃えられた。現在同寺に安置する大徳寺明了本尊・阿弥陀如来・須弥壇等はこの時代のもので宝永四年(一七二七)七月十三日大工関七兵衛の作である。同地の亀屋所蔵の文書によると

「元禄二巳年清泰寺常念仏初まる 到誓光岸代 光岸は飯田出生 藤氏 名は弥四十二歳に剃髪染衣となり当寺建立五十五歳で終命 光岸出生等の儀は先什物等前書に記し有之候所 文化十三年栗野関昌寺譲受曹洞宗法地と致し度旨すでに取り組み置き候 什物記帳関昌寺切り崩し反故となる。光岸五十五歳終命。」とある。

香坂高宗 (南北朝頃)

こうさか たかむね

大草の豪族。南北朝の頃、大河原から大草にかけての地方を支配していた豪族で、興國四(五年)三(三三)頃から三回にわたって宗良親王(別項)をこの地に迎えては親王の歌集「李花集」に記されているが、同地方には遺跡や伝承も残っている。香坂氏は佐久の香坂氏の分流といわれるが、高宗の系譜については不明である。高宗の後裔であろうか、香坂左馬助入道宗継は大塔合戦で小等原氏と戦い、その果は子息刑部少輔に遺跡を譲って高野山に入ったという(大塔物語)。その後の香坂氏に

については不明である。

高坂應平 (一八三二—一九四〇) こうさか おうへい

県会議員。明治二十六年徳風の長男として南向村(現中川村)大草に生れた。祖父謙輔(別項)は、明治初年戸長役場時代に自治制準備に尽力するとともに、遠山英一(別項)に師事して国風の和歌をよくした。父徳風は村長退任後、高坂家歴代の事蹟、特に天正年間北条氏直から大草庄三郎入道休斎にあてた忠信感悦の書状や、大草休斎家中衆十五士の起請文等の研究を郷土史家市村威人の考証を得て整理するなどした。

彼も父祖の血を享けて飯田中学・上田蚕糸専門学校卒業後村政に携わり、昭和四、八、十二年の三期に亘り十二ヶ年を村議として活躍し、昭和五年県議となり、以来終戦前南向村助役就任に至るまで、引続き県政に参与した。昭和六年坂戸橋架橋が県会において承認され、同七年三月から県の直営工事として起工され、翌八年三月長さ七十七メートルの鉄筋コンクリートの橋が完工したのは彼の力に負う所が多いとして、この地の人々はこの橋を応平橋ともよんで

いる。

昭和十五年県が蚕糸業改良のため、台湾新竹州竹南郡に原蚕種飼育場を設置した時技術面の指導と助成に当たったのは、平田蚕糸課長と高坂県参事会員の肝煎によるものであった。昭和二十九年三月六十一歳で歿した。

高坂謙輔 (一八四一—一九四〇) こうさか けんすけ

明治の歌人。弘化元年源五郎由隨の長男として大草村(現中川村)沖田(御北)に生れ、幼名を時松、字は宗礼、通称は謙輔といった。明治五年まで大草古料の名主を勤め、明治十六年最初の村会議員を一期勤めたが、その後は専ら家を治め傍遠山英一(別項)に師事して和歌を詠じ、交わりは親密で英一帰省の際は必ず高坂家を訪れ歓談に夜を更かしたという。

明治三十四年(一九二二)六月宮中月次歌会に宗良親王(別項)を題に詠進した宮中奉仕者四十七人の和歌の短冊を大河原金沢の宗良親王祠に奉献したが、その使者として遠山万弥、宮沢普山と共にこれに当り、且つ自らも乞うて同じく四十八葉を帙に収め至誠帖と称して今も同家に残っている。大

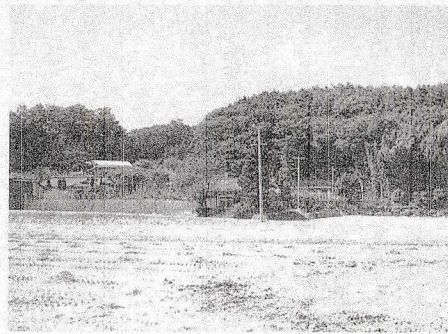


写真 12：地頭の館推定地
西岸寺参道より写す。右端は西岸寺。

現在の香坂氏の屋敷は、あまり手を加えられた様子もなく、中世の名主や武士クラスの屋敷が、そのまま現在まで姿をとどめていると考えて良さそうである。屋敷地内の建物や施設の構成は分らないが、敷地の規模を考えると、貴重な資料であると言えることができる。

地頭の館 以上、武士の屋敷について、屋敷の構成を述べてみた。これらの共通性として、堀に囲まれた主屋と堀の外に付随する鍛冶屋などの職人の工房や、下人や所従という人々の小屋の構成が浮かび上がった。この姿は、飯島郷や近郷の形というよりは、中世における一般的な形態であったと考えられる。

右に挙げた幾つかの例は、名主クラス以上であり、飯島郷で言えば、飯島氏一族に関係した屋敷と考えるのが適当である。これらのうちから地頭館を推定するには、なお疑問がある。郷の主である地頭の館は、もっと卓越した屋敷の構成を持っていたものと思われるからである。

鎌倉時代から南北朝時代は、飯島氏の援助により、西岸寺が徐々に規模を拡大していった時期である。飯島氏にとっては、寺は精神的なよりどころであるだけでなく、対外的にも重要なものであった。したがって、館と寺は、地理的にも近い距離に在ることが必要であったと考えられる。このことからすれば、館の場所は、西岸寺の近くへ求めることが自然である。また、飯島家の古い墓もここにあることから、必然的に西岸寺の南に隣接した「城」地籍が、第一候補として挙げられる。ただ「城」地籍につ

屋敷に付随する性格の遺構が発見されたことは、出土遺物の多さとともに、飯島氏一族の中でも、かなりの地位を占める武士の屋敷が、近くに在ったことを裏付けるに十分で、更に、将来の周辺調査に期待が持たれる重要な場所と言えることができる。

岩間氏の 岩間城と呼ばれている一帯は、中世の城というよりは、片屋敷 敷 桐氏の支族の岩間氏が、日常生活を送った屋敷の性格が強いように思われる。発掘調査の結果、台地を南北に横断する堀が確認され、堀の西側に方形の堅穴が二か所、だ円形の堅穴が一か所と、小堅穴や柱穴などが発見された。これらの遺構は、主屋に付随した貯蔵施設や掘立柱の建物の跡と考えられる。

出土した陶磁器から、ここでは、鎌倉時代から戦国時代までの長い間、生活が営まれたと思われる。出土した遺物から、施設の多くは室町時代か戦国時代のものであると考えられる。

日曾利の 日曾利の天竜川に向かって、西へ緩やかに傾斜したひな壇上の台地の先端部の一画からは、中国製屋敷 敷 の青磁や白磁片が出土している。周辺の状況などと合わせて、ここに、中世の名主や武士クラスの屋敷があったことが考えられる。

南北朝時代の伊那合は、政治支配の上では、南朝方と北朝方に分かれていた。竜西地域の北朝方に対して、竜東の大草郷の香坂氏は、知久氏と共に、信濃における南朝方の中心人物であり、宗良親王を助けて奮戦した。

日曾利は、大河原城主の香坂氏とも関係が深いと言われ、竜東地域の政治・経済・文化圏の中で、竜西の飯島郷とは異なる歴史が刻まれてきた。しかし、その歴史については、古文書や資料も少なく、不明な点も多い。

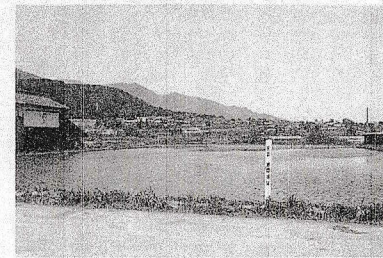


写真 11：岩間城跡
写真右端に堀があった。

1960年 2月15日 第5号

金夕斗
隔洋